

(青土社発行「ユリイカ」2018年3月号より転載)

倉橋由美子文芸賞・選評

< 小谷 真理 >

この文学賞では候補作を読む前に、倉橋由美子のデビュー作「パルタイ」に目を通す。そこが基本ラインと考えるからだ。

実際昨年までの選考では、倉橋らしさを意識した投稿が多かった。が本年は少々事情が異なった。SF、ファンタジー、BL小説など、ジャンルのバラエティに富んでいた。そういえば倉橋氏もまた、後年ジャンル越境を試みるアヴァンギャルドな作家であった。

選考会ではジャンル小説の秀作が並び、評は割れた。純文的王道を探究する「カメラ・オブスクラ」、ロボットSFの「星鋼のアルゴノルツ」、タイムリープSFの「夕焼け小焼け」、ファンタスティックな「閻魔の薬」、青春小説の「指先に薔薇を」。いずれも各ジャンルの約束事を上手に踏襲し、なかなかの出来栄え。

もっとも破綻なく抜きんでいていると思ったのは「星鋼のアルゴノルツ」。近未来を舞台に、怪物と闘うため遺伝子改変され生体兵器として実験的に生み出された子供らの戦場風景を描いている。複雑な設定と展開をテキパキ説明し、少年と少女の接近遭遇を若き日特有の含羞とともに捉え、全体的にポジティブな姿勢が貫かれていることなど、好感が持てる作品である。「カメラ・オブスクラ」は日々の閉塞感が、奇妙な動物の持つ違和感と重ね合わされるように達者な文章で表現されていた。しかし二つとも小説としてちゃんと出来上がっているものの、どこかでみたお話のようではないかという指摘が出た。特に、一般読者には新奇に見えても、ジャンル読者にとってはありきたりに見えてしまうのではないか。この指摘は上記作品のいずれも言えることだった。

そこで、斬新さという点で「泉」の衝撃性が注目された。人種混交の米国へホームステイに行った日本の女子学生が、現地で事件に遭うという展開である。複雑な問題を単純化することなく複雑なままに受け止め、帰国しても違和感が重く残り続けるという、学生目線で捉えた社会問題性は、確かに、それこそ「パルタイ」に通じるものだろう。こうして基本に立ち返る形で、選考委員会の意見はまとまったのである。

< 伊藤 氏貴 >

あなたは冷たくもなく、熱くもない——黙示録の中でとある教会に対して語られたこのことばが、二十二編を読み終えたときにふと頭に浮かんだ。みなそれなりにかたちは整っていて、平均値は一般の文学新人賞のそれより高いかもしれない。

しかし、総じて「平均的」である。手ひどい評言であることは承知の上でやはりこう言わざるをえないのは、はじけるような熱量を感じなかったからだ。「よく書けている」と素直に言ってもよいのだが、これが決して真の褒めことばでないことくらい、この賞に

募する者ならすぐわかるだろうから、変に気を遣った物言いはしない。みな、うまくまとめようとするのにばかり汲々としているのだ。

そのなかで、「泉」にかろうじて、今、ここを超えていく可能性のようなものを垣間見た。体験談なのかもしれない。聞いた話なのかもしれない。しかしそれがたんに物語としてまとめきれないほどの動揺を主人公に起こしている。この揺らぎが主人公を真の意味で変容させるのかについての解はぼんやりしているが、動揺の中に今の自分を超越する契機がほの見える。

「指先に薔薇を」にもたどたどしい部分はあるが、これは残念ながら現状を否定する可能性というよりは小説としての未熟さとしか映らない。場面には見るべきところがあるが、全体としての構築が甘いところがある。

一方、「星鋼のアルゴノルツ」はこのまま製品として世に出しておかしくない完成品だが、あくまで娯楽のための製品としてである。

「カメラ・オブスクラ」も非常に緻密な文章と構成とを具えている。が、純文学を指向する以上、なぜこれが今この時代に書かれなければならないかが問われてくる。娯楽小説と異なり、たんなる完成品ではすまされない分野であるため点は辛くなる。

他に「閻魔の薬」、「アヴァンチュール」をおもしろく読んだ。

はっきりと銘打ってはいないが、この賞は「新人賞」だと勝手に心得ている。どこかで読んだことのあるような完成品よりも、一読してもよくわからず、脳が火傷しそう、あるいは凍傷になりそうだが、それでも読み返したくなるような問題作を望む。

#### < 波戸岡 景太 >

デビュー前の自分に、なぜ小説を書くのか、と問うことは、ひょっとしたら意味のないことなのかもしれない。少なくとも、学生を対象とした文学賞の選者として、今回私が重視したのは、ひたすらに物語を紡ぎたいという欲望と、どうしてもこれを書かねばならぬという使命感、そして、自分であればきっと書き切れるはずだという根拠のない自信であった。幸いにも、応募作品には、これら三つの思いを宿したものが多く、その点で安心して審査に臨むことができた。

大賞受賞作となった「泉」は、小説としての構成や文章の彫琢など、技術的に未熟な箇所も少なくないが、これを書かねばならぬという使命感において、群を抜いていた。書き手は、みずからの作家としての欲望と自信を、誠実な筆運びによってコントロールし、そのおかげもあって、アメリカ西海岸において語り手の身にふりかかった後味の悪い事件は、物語が閉じられるまでずっと、小説のありふれた「ネタ」に墮すことがなかった。今回の大賞受賞をきっかけとして、根拠ある自信のもと、小説家としての野心を、より激しく燃やしていただければと思う。

佳作の一つめである「星鋼のアルゴノルツ」は、きわめて質の高いSF小説だった。しかしながら、正直なところ、これが長大なストーリーの抜粋であるかのような印象を、私は最後まで拭うことができなかった。今回は、中・短編という枠組みをいかした物語づくりをして欲しい。

佳作二つめの「指先に薔薇を」は、森見登美彦的な世界観を用いて、魅力的な学園小説となっている。今後は、その魅力をていねいに磨き上げ、いかにして説得力のあるオリジナリティを獲得するかが課題となるだろう。

三つめとなる「カメラ・オブスクラ」は、とても精緻な出来栄えだった。このような純文学作品を完成し得る学生がいるということに、審査員としても、また大学で文系科目を教える人間としても嬉しくなる作品であった。このまま後ろを振り返らずに創作を続けていけば、いつかどこかで、自分はこの作品を書くために生まれてきたと思えるテーマに巡りあえることだろう。叶うならば、私もぜひ、その現場に立ち会いたい。

(ユリイカ掲載記事の転載をご快諾いただきました青土社に感謝申し上げます)